

広告



▲▶「おやふる工房」の皆さんは農閑期の12月～3月にかけて、主に生振ふれあい研修センターで活動します。



▲この日、試作されたメニュー。石狩産小麦「きたほなみ」を使った肉まんやうどん、ゴボウとニンジンも入った男爵コロッケなど、いずれも「生振産の味」です。



3月24日(土)、JAいしかり地物市場 とれのさどで「いしかり『味本市』^{みほんいち}」というイベントが開催されます。地元食材を使ったさまざまな「石狩グルメ」が並ぶ中、表紙のケーキも登場予定です。

「実はこのケーキ、ナガイモをたっぷり使っているんですよ」とは、「おやふる工房」代表の宮北貞子さん。

「おやふる工房」は、主に生振地区で農業を営む女性10人による生産者グループです。昨年春、ともに10年以上の活動歴がある生産者グループ「なかよし会」と「ふきのとう」が合併したもので、「同じ生振で活動しているのだから、これからは一緒に地産地消の推進に頑張りましょう!」ということになりまして」と宮北さん。今ではそろいの赤いエプロン姿で、

「おやふる工房」が作る ふるさとこの味

生振小学校に出向いてみそ作りを指導したり、料理教室で講師を務めたり、まつりなどの行事にも参加して、もち米やムラサキ玉ネギの「パープルジャム」など自分たちのつくった農作物や加工品を販売します。

撮影に訪れたこの日は前述の「いしかり『味本市』」と、3月17日(土)・18日(日)に行われる「石狩市公民館まつり」に出品するためのメニューを試作。「例えば、消費者の方にはナガイモを焼いて食べることも新鮮のようで、私たち生産者が知っていること、そして新しい食べ方も提案できたらと思います」

ぜひ皆さんも上記イベントで「おやふる工房」が作る「石狩グルメ」を堪能してみませんか!

見え始めた人口減少問題 ①

3月は慌ただしい。学生にとっては受験と合否発表、卒業式すら待たずに就職の地に巣立つ者もいるだろう。住民基本登録人口も大きく変動を示し、年間で最も人口の減少する月である。過去5年間の3月における社会的動態を要因とする流入、流出の差はマイナス361人となっており、例年この減少を回復するには秋までかかっていた。ちなみに流入人口が多くなるのは10月頃である。企業誘致に力を入れている我が市においても、若者の流出は避けられないのが現実で、近年は回復できず、明らかに人口の減少化が忍び寄ってきている。

◆市では若年就労者の誘引要素となる、子を生み育てる環境づくりに、市民の皆さんや団体との協働により奮闘中で、少しは評価も変わりつつあるのではないかと思う。就業の確保とワーキュライフバランスのとれる環境の創出、この両輪の大切さは言うまでもない。直面する問題はもうひとつ、住まいの問題である。賃貸マンションや長期滞在型などの集合住宅系への民間投資の遅れは、その多くを札幌からの通勤に頼らざるを得ない状況にある。

◆石狩市のポテンシャルは今日の社会経済情勢、特にエネルギー問題からして高まっていることは確かなだけに、潜在的課題の解決は急務となっている。国立社会保障人口問題研究所は2005年を100として、2020年の生産年齢人口は79・0、2030年70・5と予測した。このコンピューター数値への挑戦は、言わずもがな社会保障問題の解決への道でもある。

(市長)